【実践報告】

発達障害児に対する感覚統合を基盤とした余暇支援の試み

伊藤 信寿

聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部作業療法学科

E-mail：nobuhisa-i@seirei.ac.jp

Leisure Support Programs for Children with Developmental Disorders Using Sensory Integration

Nobuhisa ITO

Division of Occupational Therapy, School of Rehabilitation Sciences, Seirei Christopher University

要旨

今回は，感覚統合の視点を基盤とした余暇支援を計画し，実施したため，活動中における子どもの行動に特に変化が見られた２事例について報告する．15 名の発達障害児に対し，３日間の余暇支援を実施した．内容は，感覚統合を基盤とした活動を計画した．結果は，２事例においては，JSI-R より前庭覚と固有覚に鈍麻な傾向，触覚に過敏な傾向が推測された．この結果を基に，感覚統合を基盤とした活動を提供したところ，活動中に若干の変化が見られた．また，保護者からのアンケートから，子どもの様子については概ね肯定的なフィードバックであった．さらに，保護者の期待に応えられた活動であったといえる．

キーワード：感覚統合，余暇支援，発達障害

Key Words：sensory integration, leisure support, developmental disorder

Ⅰ．はじめに

国内外の疫学的研究や学校現場における調査では，支援を必要とする発達障害児が増えていることが指摘されている[1]．事実，医療機関を訪れる子どもと家族は後を絶たず，健全な発達を支援する通園施設や障害児デイサービスは常時，利用定員を超過している．A 市においても例外ではなく，発達医療総合福祉センターによると，個別の療育や支援を受けられない発達障害児が多いことを指摘している．

さらに，実際に A 市在中の発達障害児の母親は，幼少期においては支援が比較的多くあるが，就学期以降は支援がなく，困っているということを多く訴えている．このように，発達障害やグレーゾーン等の育てにくい子どもに対する，就学期以降の専門的支援は質・量ともに不足しているため，地域社会が子育てに関心を示し，保護者の孤独感や親子関係の課題解消に向けて協働して支援を構成することが要請されていると考える．

児童期から青年期における支援のひとつとして余暇支援がある．発達障害児にとって充実した余暇を過ごすことは，生活の質を向上させるために欠かすことのできない要素であり，障害のある人たちが家庭や地域でいかに充実した余暇を過ごすか，その支援方法について様々な模索が続けられている．森山と土井は，余暇における活動が自分自身を成長させ，想像力や能力を広げ，生活を豊かにしていく可能性があると指摘している[2]．

また，近年，障害の有無に関わらず余暇活動は，生活の質の向上という観点から関心が高まってきている[3]．渡邉は，余暇概念の社会福祉的把握は，積極的な自己実現の手段としての社会参加の方法として捉えることが必要であろうと述べている[4]．人が余暇を身に付け，その活動の範囲を広げていくことは，最終的に社会参加へ発展するものと考えられる[5]ことから，余暇活動は発達障害児にとって非常に重要な意義を持つと考えられる．

さらに近年では，発達障害児の余暇活動の充実に向けた取り組みとして地域生活支援事業の一環で，休日の活動を支援する動きが地方自治体レベルで行われるようになったが，発達障害児の余暇の過ごし方は，家で過ごす場合が多いという現状には依然として問題があるといえる．

一方，発達障害に関するこれまでの研究で，自閉症スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：以下 ASD）児の 80％以上に感覚刺激に対する反応異常が見られることが報告されている[6][7]．さらに，Diagnostic and statistical manual of mental disorders fifth edition（DSM-5）[8] の ASD の診断基準において新たに感覚の問題に関する項目が挙げられたため，療育等で感覚の問題をとらえる必要性が高まっている[9]．発達障害児の感覚の問題としては，DSM-5 の診断基準の項目では，感覚入力に対する敏感性あるいは鈍感性，あるいは感覚に関する環境に対する普通以上の関心が挙げられ，偏った感覚の受け取り方が指摘されている．これは，好きなあるいは嫌いな感覚が偏っているために，興味関心の幅が狭く，子どもにとって適切な余暇活動を見つけることが難しいことを意味している．その結果，休日等は家でテレビやゲームという 1 人遊びに没頭している場合が少なくない．感覚の問題に対する支援方法のひとつとして感覚統合療法（Sensory Integration：以下 SI）がある．SI は子どもの好きな感覚を見つけ（感覚ニーズ），感覚ニーズを提供することで情緒の安定や日常生活・余

暇活動に繋げていく支援方法である．今回は，地域での余暇支援づくりの一端として，子どもの長期休業時における支援に着目し，SI 的な視点を基盤とした余暇支援活動を計画して実施し，活動中の行動に特に変化が見られた 2 事例について報告する．

Ⅱ．感覚統合療法について

Ayres は SI とは「人間が自分の身体や環境からの感覚情報を整える神経学的過程であり，環境の中で自分の身体を有効に使うのを可能にする」ことであると定義した[10]．さらに，自分自身の身体の情報や周囲の情報（感覚刺激）を上手く整理して取り入れることが苦手で，混乱している方に対して，遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して，感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である[11]．例えば，光や音に非常に過敏なため，過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや，触覚が非常に過敏なため，物に触れない，人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども，逆に触覚が鈍麻なために，ボタンや紐の感触がわかりにくく，上手くボタンをはめられない，靴ひもを結べないといった不器用な子どもが該当する．あるいは，高さやスピードに対して非常に鈍麻なため，高所のような危険な場所に行きたがったり，過剰に動き回るなど，感覚刺激に対して過敏あるいは鈍麻なために，問題行動を引き起こしている子どもが少なくない．このような子どもに対して，遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより，感覚情報処理機能の成熟を促し，苦手な部分を育てていくことを目的としたものが SI である．

Ⅲ．方法

1．対象

A 発達支援センターを卒園した小学 1 年～ 4 年生 15 名を対象とした．15 名のうち 7 名が特別支援学校在籍，8 名が発達支援級在籍であった．平均年齢は 6.7 歳（6 歳から 8 歳）であり，男児 13 名，女児 2 名であった．

募集は，2013 年と 2014 年の春に実施した．A 発達支援センターを卒園し，在園中に作業療法士による SI に基づいた集団作業療法に参加した子どもの家庭に，センター長より余暇支援活動参加の案内と希望申請を送付した．2013 年では 7 名，2014 年では 8 名から参加希望があり，同意が得られた 15 名に対し余暇支援活動を実施した．

2．余暇支援活動の内容

1）実施期間

2013 年に参加した 7 名は, 2013 年 8 月 28 日, 29 日, 30 日の 3 日間, 2014 年に参加した 8 名は, 2014 年 8 月 19 日，20 日，21 日の 3 日間余暇支援活動を実施した. 実施期間である 3 日間は, 市内にある倉庫を借用し，活動を行った．時間は 10 時から 17 時までであるが，参加時間は各家庭で自由とした．活動には子どものみが参加し，送迎は保護者に依頼した．

2）評価内容

活動開始前に，事前に参加する子どもの保護者に対し，日本感覚インベントリー（Japan Sensory Inventory Revised：以下 JSI-R）への記載を依頼した．JSI-R は，感覚統合障害の評価法として Dunn[12] によって開発された Sensory Profile を太田らが改訂し，日本にて標準化したチェックリストである[13]．子どもに感覚刺激の受け取り方に偏りがある場合，そ

の傾向が様々な行動に表れてくることがある．JSI-R は，このような行動の出現頻度の評価により，子どもの感覚刺激の受け取り方の傾向を把握することを可能とする．JSI-R は，前庭感覚 30 項目，触覚 44 項目，固有覚 11 項目，聴覚 15 項目，視覚 20 項目，嗅覚 5 項目，味覚 6 項目，その他 16 項目の 8 つの下位検査と 147 の質問項目から構成されている．結果は，「Green：典型的な状態」，「Yellow：若干の偏りの傾向が推測される状態」，「Red：偏りの傾向が推測される状態」の 3 段階評価で解釈する．今回，JSI-R は活動の効果判定ではなく，活動内容設定の指標を得るために実施した．

さらに，保護者に対し 3 日間の活動終了後に，当該活動に対する感想等についてアンケート調査を実施した．

3）活動内容

SI を基盤とした遊びは，子どもの感覚処理の特性に合わせた活動を設定した．活動は，JSI-R の結果を基に，感覚の発達の偏りに対して SI 的視点から，感覚調整を考慮した遊具や玩具を遊びに取り入れた．そして，障害特性に応じ前庭刺激，固有受容刺激，触覚刺激などを子どもの適応反応を引き出すように提供した．

4）スタッフ

著者 1 名と作業療法学科の学生ボランティア 5 名であった．

5）倫理的配慮

本研究は，聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て実施した（認証番号 13025）．

Ⅳ．結果

1．参加状況

今回 3 日間全て参加した子どもは，15 名中 8 名であった．2 日間の参加は 6 名，1 日のみの参加は 1 名であった．

2．活動内容の設定

JSI-R における総合点および各感覚領域における感覚刺激の受け取り方の傾向を表 1 に示す．総合点では，Green が 3 名，Yellow が 6 名，Red が 6 名であった．このことより，参加者の 15 名中 12 名で感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測された．また，嗅覚と味覚以外の各感覚領域で参加者の半数以上に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった．さらに，身体図式の発達の基盤とな

表 1　JSI-R の結果

	Green	Yellow	Red
前庭覚	3 名	8 名	4 名
触覚	4 名	6 名	5 名
固有覚	5 名	5 名	5 名
聴覚	0 名	7 名	8 名
視覚	3 名	5 名	7 名
嗅覚	8 名	7 名	0 名
味覚	8 名	6 名	1 名
その他	2 名	2 名	11 名
総合点	3 名	6 名	6 名

Green：典型的な状態，Yellow：若干の偏り推測される，Red：偏りが推測される

る自分の身体を知るための感覚である前庭覚は15名中12名，触覚は15名中11名，固有覚は15名中10名が，鈍麻の傾向が推測される状態であった．感覚情報に対して低反応（鈍麻）とされる子どもたちは，神経学的閾値が高く，閾値に達するために多くの刺激を必要とする[14]．さらに感覚入力に対して閾値が高い場合，環境と相互作用をもつために強い前庭－固有覚を必要とし続けると述べている．そのため，SIを基盤とした遊びは，強い前庭覚刺激や固有覚刺激が入力されやすいトランポリンやブランコ，よじ登るという活動を主に設定した．さらに，触覚刺激が得られるシェービングクリームを体中に塗り，ブルーシートを敷いた傾斜を滑る活動（ウオータースライダー）も取り入れた．具体的な活動は表２と表３に示した．

表２　余暇支援活動の内容（2013年）

	8/28	8/29	8/30
午前	SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（カレー）	昼食（お好み焼き）	昼食（うどん）
午後	おやつづくり（かき氷） ウオータースライダー SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 自由	おやつづくり（白玉） ウオータースライダー SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 自由	おやつづくり（ホットケーキ） SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 自由

表３　余暇支援活動の内容（2014年）

	8/19	8/20	8/21
午前	SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（流しそうめん）	昼食（ハンバーグ）	昼食（うどん）
午後	おやつづくり（かき氷） ウオータースライダー SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 自由	おやつづくり（白玉） ウオータースライダー SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 自由	おやつづくり（ホットケーキ） ウオータースライダー SIを基盤とした遊び （トランポリン，ブランコ，登るなど） 自由

また，昼食づくりやおやつづくりにおいても，触る，練るなど，触覚刺激や固有覚刺激が得られるような献立にした．具体的には，カレーではジャガイモやニンジンを切る，お好み焼きやホットケーキでは水で溶いた小麦粉等を混ぜる工程，かき氷では自動式のかき氷機で氷を削る工程において固有感覚刺激が入力されやすい．さらにハンバーグでは挽き肉やパン粉を混ぜる工程，うどんでは生地を練る，伸ばす，切る，足で踏む工程において，触覚や固有感覚刺激が入力されやすい．

3．事例

1）事例1

特別支援学校小学部1年に在籍中の女児である．母親の主訴は，椅子に座って活動することが難しく，多動傾向であることであった．動くことが好きなので，公園等で遊ばせたいが，順番を守れない，ブランコでも大きく揺らさないと満足しないので，危なくて連れて行けない．普段子どもが満たさせるくらいダイナミックに遊べる場がないとのことで，当該活動に参加した．表4にJSI-Rの各感覚領域の得点と代表的な質問項目を示した．JSI-Rから前庭覚，触覚，固有覚，聴覚，視覚がRedゾーンであり，過敏あるは鈍麻であることが推測できた．JSI-Rの質問項目に対する回答をみると，前庭覚と固有覚は鈍麻であり，触覚と聴覚，視覚は過敏傾向であることが確認できた．

活動は，前庭覚と固有覚刺激が強く入りやすいトランポリンやブランコを中心に実施した．トランポリンは，彼女自身で跳ぶ他，著者が彼女の両手を把持し，彼女がジャンプし降りてくるタイミングで彼女の手を下方向に引き，下肢に体重がより負荷されるよう誘導した．これにより下肢あるいは体幹に固有覚刺激が強く入りやすくなる．ブランコは，揺れるのみでは前庭覚刺激が主だが，揺れの途中で予測をさせず止めたり，ブランコを傾けることで，彼女は落とされないようにブランコのロープにしがみつ

表4　事例1におけるJSI-Rの結果

	評価	項目
前庭覚	Red	ブランコなど揺れる遊具で大きく揺らすのを好み，繰り返し何回も行う 床の上でぴょんぴょん跳ねていることが多い 回転物を見つめることを好む
触覚	Red	粘土，水，泥，砂などの遊びを嫌がる 手や足が少しでも汚れることを嫌がる 洗面，洗髪，散髪，歯磨き等を嫌がる
固有覚	Red	風船や動物などを，そっと握ることができず，握り方の力加減がわからない 固い食物や弾力のある食物を好む 積み重ねられた布団やマットの間に入り込んでいることがある
聴覚	Red	特定の音に非常に過敏な反応をする 突然大きな音がすると怖がる
視覚	Red	いろいろな物が見えると気が散りやすくなる 色や形にこだわる
嗅覚	Yellow	
味覚	Green	
その他	Red	
総合点	Red	

Green：典型的な状態，Yellow：若干の偏り推測される，Red：偏りが推測される

き，固有覚刺激が得られる．これらの遊びは，ブランコの揺れを急に止められたり，傾けられたりすることに対して，落とされないように瞬時に身体のどこに力を入れるかを判断し，持続することが要求される．これらの活動に対する彼女の反応は，はじめは揺れや傾きに対して，容易にブランコから落ちていたが，徐々に瞬時に上肢に力を入れ，持続して姿勢を保持することが可能となった．それに伴い，ラダー（ロープのハシゴ）を登る，平均台を渡る等の力やバランスを必要とする遊びを自発的にするようになった．

母親によると，活動した日は家に帰っても，あまり動き回らず，落ち着いているとのことであった．

２）事例２

地元の小学校の発達支援学級に通う小学校１年生の男児である．母親の主訴は，聴覚過敏のため嫌いな音があり，予測がつかない初めての場所は入りにくく，家庭以外で遊べる場や，安心して子どもを預けられる場がないとのことであった．表５に JSI-R の各感覚領域の得点と代表的な質問項目を示した．JSI-R から前庭覚，固有覚，触覚，聴覚が Red ゾーンであり，過敏あるは鈍麻であることが推測できた．JSI-R の質問項目に対する回答をみると，前庭覚と固有覚は鈍麻であり，触覚と聴覚は過敏傾向であることが確認できた．

活動は，事例１と同様に前庭覚と固有覚刺激が強く入りやすいトランポリンやブランコを中心に実施した．また，言語指示理解が良好で知的能力が高かったため，遊びの他にうどんづくりで生地をこねる，生地を足で踏む，ハンバーグづくりで挽き肉を煉る，かき氷づくりおいてトンカチで氷を割るなど固有覚刺激や圧迫刺激が得られる活動を積極的に行った．

トランポリンやブランコという遊びを提供したことにより，聴覚過敏による新しい場に入れないという制限は生じなかった．また，母親からはどのような活動にもすぐに飽きてしまうと

表５　事例２における JSI-R の結果

	評価	項目
前庭覚	Red	ブランコなど揺れる遊具で大きく揺らすのを好み，繰り返し何回も行う 理由もなく周囲をウロウロしたり，動き回っていることが多い ジェットコースターのようなスピードのある乗り物や回転する乗り物を好む
触覚	Red	体に触れらることに非常に敏感である 極端に暑がり寒がりである そばに人が近づくと，すっと逃げる
固有覚	Red	歯ぎしり，爪かみの癖がある おもちゃなどの物の扱いが非常に雑で，よく壊すことがある 積み重ねられた布団やマットの間に入り込んでいることがある
聴覚	Red	特定の音に非常に過敏な反応をする 突然大きな音がすると怖がる 人混みや，うるさい場所を嫌う
視覚	Yellow	
嗅覚	Yellow	
味覚	Green	
その他	Red	
総合点	Red	

Green：典型的な状態，Yellow：若干の偏り推測される，Red：偏りが推測される

報告されていたが，固有覚刺激や圧迫刺激が得られる昼食やおやつづくりにおいて，持続して参加が可能であった．

母親によると，当該活動への参加を楽しみにしており，毎日楽しく過ごせたとのことであった．また，体を動かして過ごせたので，帰宅後も落ち着いて過ごせたとのことであった．

母親へのアンケート結果では，事例１と２とも，「参加してお子さんの様子はどうでしたか」という質問に対し，「大変よかった」と高評価であった．

４．アンケート結果

1)「参加してお子さんの様子はどうでしたか」，「参加してご家族にとってはどうでしたか」という質問に対し,「大変よかった」から「よくなかった」までの５段階で評定した(表６)．その結果，概ね高評価であった．

2)「参加する前に，期待していたことは」という質問に対し自由記載で回答してもらった．その結果,「遊具で遊べること」,「本人が楽しんで参加できれば」,「初めての場所，人にどのくらい適応できるか心配で，今後の参考に様子をみたい」,「楽しい時間が過ごせる場であってほしい」,「親が安心して子どもを預けられる場であってほしい」というような内容であった．子どもが楽しいと思える場になればという居場所づくりに関連する内容がほとんどであった．

3)「お子さんの余暇支援活動など，どのようなサービスがあればいいと思いますか」という質問に対し自由記載で回答してもらった．その結果,「今回のように思い切り体を動かして遊べる場」,「送迎から支援してくれるサービス」,「きょうだいで同じ場所で見てくれるサービス」,「プール活動を支援してくれるサービス」,「気軽に参加できるといい」,「子どもの適性を見出し，継続しての活動につながっていくような形があればいい」,「公共の施設などは行きたくても行けないので，気にせず遊ばせてあげられる所」という内容であった．家庭以外で公園や公共施設に連れて行きたいという思いの現れが現れた回答であった．

4)「また，このような活動があれば参加したいですか」という質問に対しては，全員が「参加したい」と回答した．

Ⅴ．考察

今回，子どもの長期休業を利用し，SI を基盤とした余暇支援活動を実施した．その結果，保護者からは概ね肯定的な感想が聞かれ，保護者の希望に沿った支援であったと考えられる．

活動内容設定に際して，各々の状態を把握するために，JSI-R を用いて評価した．その結果，全例に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態が認められた．特に，前庭覚，固有覚，触覚という身体を動かすことにより得られる感覚刺激に対する鈍麻が多く認められた．前庭覚，固有感覚が鈍麻な子どもたちは，その感覚ニーズを満たすために，多動等，落ち着き

表６　活動に対するアンケート結果

	大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
参加してお子さんの様子はどうでしたか？	9名	6名	0名	0名	0名
参加してご家族にとってはどうでしたか？	9名	6名	0名	0名	0名

がなく，問題行動として，捉えられることが少なくない．そのため，普段の日常生活から，子どもたちの感覚ニーズを満たす遊びや場の提供が必要となる．

本研究の２事例は，前庭覚と固有覚が鈍麻であり，触覚が過敏傾向であった．これに対して，持続した固有覚が得られる遊びや固有覚や圧迫刺激が得られる活動を実施した．SI の効果を検証した研究においては，感覚鈍麻な自閉症児に対し圧迫刺激を与えた結果，比較群と比較して緊張と不安が有意に低下し，生理的覚醒の変化を調べる電気皮膚反応の反応性が低下したとの報告がある[15]．また，１ヶ月間両親からマッサージを受けた自閉症児は，比較群より多動や衝動性や常同行動が減少し，課題における行動が改善したことが報告されている[16]．さらに，強い触圧覚および固有覚刺激によって鎮静効果が得られると報告されている[11]．これらのことより，提供した活動より得られた固有覚刺激や圧迫刺激が，子どもの不安等を軽減させ初めての場でも早期から馴染むことができ，または家庭での落ち着きに影響を与えた可能性がある．また，固有覚刺激と圧迫刺激は触覚過敏を抑制する作用があると報告されている[11]．この報告からも，今回の固有覚刺激や圧迫刺激が事例１と２における触覚過敏傾向に影響を与えた可能性がある．

また，DSM-5 の ASD の診断基準の中において，感覚入力に対する敏感性あるいは鈍感性，あるいは感覚に関する環境に対する普通以上の関心とあり，このことが限定された反復する様式の行動，興味，活動の原因のひとつとしている．このことからも，感覚調整の改善を図る活動の提供は必要であると考えられる．

本研究では，子どもの感覚の受け取り方に対する状態像を把握するために，JSI-R を使用した．しかし，岩永は，JSI-R に加え保護者へのインタビューや対象者の行動観察などの情報と照らし合わせて解釈することが重要と述べており，今後は事前に保護者からの情報提供を依頼し，総合的に解釈することが必要であると考えられる．

参加した保護者からは，「公共の施設などに行きたいが，周囲が気になり行けない」，「身体を動かして遊べる場がほしい」という希望が聞かれた．細谷と大庭は，知的障害者の余暇の過ごし方について，児・者共に平日，休日を問わずテレビ視聴が最も高頻度と報告している[17]．また，全日本手をつなぐ育成会が行った本人や親に対するアンケート・インタビュー調査においても，４割の人がテレビを見て過ごすと回答しており，家庭内の過ごし方についての選択の幅が限られていることを報告している[18]．余暇の過ごし方について保護者の希望は，身体を動かす，公共施設を利用する等，外出して活動することであったが，利用できる地域資源が少ないのが現状である．そのため，発達障害児は感覚遊びを経験する十分な機会が少なく，感覚調整の発達を未熟にしている可能性が高い．そこで，誰もが気軽に出かけられ，特に感覚運動が得られる地域資源による支援が重要であると考えられる．

これらの現状があり著者は，感覚調整の発達を促す場の設立を考え，NPO 法人を立ち上げ，児童福祉法による指定障害児通所支援事業所を立ち上げた．これは，未就学児が通所する児童発達支援事業所と小学生以上の子どもが通所する放課後等デイサービスである．現在はこの事業所において SI を基盤とした療育を実施している．浜松市内には児童発達支援事業所と放課後等デイサービスは，すでに多数設立されているが，感覚調整を促す SI を基盤とした療育を

実施している施設はない．そのため，重要な位置づけの施設であると考える．しかし，児童福祉法に基づいて運営されるため，利用に際しては市町村発行の受給者証が必要であり，誰もが気軽に利用できる場とはいえない．そのため，今後も発達障害の子どもたちが，気軽に遊べ，集うことができる場の提供を検討していくことが課題である．さらにSIという考え方の療育もまだ根付いていない．しかし，近年，教育委員会や保育士会からSIを基盤とした発達障害児の理解や関わり方に関する研修会の講師依頼が増加している．これは，発達障害に対する支援において心理面のみでなく，感覚運動面からの支援に対して教育や保育の場でも，関心を示し始めている徴候と考えられる．今後は，指定障害児通所支援事業所の活動内容の充実や，教育・保育関係の専門職に対してSIを基盤とした考え方の啓蒙活動を実施していくことが必要であると考えられる．

文献

1）今井美保，伊東祐恵.（2014）．横浜市西部地域療育センターにおける自閉症スペクトラム障害の実態調査－その１：就学前に受診したASD児の疫学－．リハビリテーション研究紀要, 23, 41-46.

2）森山千賀子，土井晶子.（2009）．日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題－QOLの向上に効果的な余暇活動とは－．白梅学園大学・短期大学紀要, 45, 49-67.

3）中山孝之.（2000）．知的障害児の余暇と地域生活－余暇の実態調査より－．情緒障害教育研究紀要, 19, 239-246.

4）渡邉洋一.（2000）．知的障害者への余暇の考察．淑徳大学社会学部研究紀要, 33, 43-56.

5）伊藤健，菅野敦，橋本創一，浮穴寿香，勝野健治，片瀬浩.（2007）．特別支援学校における余暇支援と社会参加に関する実態調査．発達障害支援システム学研究, 6, 59-64.

6）Gomes, E., Pedroso, F. S., & Wagner, M. B.（2008）：Auditory hypersensitivity in the autistic spectrum disorder. Pro Fono, 20, 279-284.

7）Marco, E. J., Hinkley, L. B., Hill, S. S., Nagarajan, S. S.（2011）: Sensory processing autism: a review of neurophysiologic findings. Pediatr Res, 69, 48-54.

8）高橋三郎，大野裕（監訳）.（2014）. DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引. 東京：医学書院.

9）岩永竜一郎.（2015）．自閉症スペクトラム症の感覚処理の問題への支援．発達障害研究, 37(4), 334-341.

10）Ayres, A. J.（1972）. Sensory integration and learning disorder: Los Angeles. Western Psychological Services.

11）土田玲子，小西紀一（監訳）.（2006）．感覚統合とその実践　第２版．東京：協同医書出版社.

12）Dunn, W., & Westman, K.（1997）. The sensory profile: The performance of a national sample of children without sdisabilities. American Journal of Occupational Therapy, 51, 25-34.

13）太田篤志，土田玲子，宮島奈美恵.（2002）．感覚発達チェックリスト改訂版（JSI-R）標準化に関する研究．感覚統合障害研究, 9, 45-56.

14）Dunn, W.（1997）. The impact of sensory processing abilities on the daily lives of young children and their families. Infants and Young Children, 9, 23-25.

15) Edelson, S. M., Edelson, G. M., Kerr, D. C. R., & Grandin, T. (1999). Behavioral and physiological effects of deep pressure on children with autism: A pilot study evaluating the efficacy of Grandin's hug machine. American Journal of Occupational Therapy, 53,145-152.
16) Escalona, A., Field, T., Singer-Strunck, R., Cullen, C., & Hartshorn, K. (2001). Brief Report: Improvement in the behavior of children with autism following massage therapy. Journal of Developmental Disorder, 31, 513-515.
17) 細谷一博，大庭重治.(2009)．知的障害児・者を対象とした余暇活動支援事業におけるボランティアの役割．上智教育大学特別支援教育実践研究センター紀要 A, 49, 43-50.
18) 全日本手をつなぐ育成会.(2004)．つどう　でかける　あそぶ　ハマる．知的障害児者余暇活動研究事業報告書.

Leisure Support Programs for Children with Developmental Disorders Using Sensory Integration

Nobuhisa ITO

Division of Occupational Therapy, School of Rehabilitation Sciences, Seirei Christopher University

Abstract

For this study, leisure support based on sensory integration was planned and implemented. Changes in the child's behavior is reported as seen in two instances during the leisure activity. We conducted a three-day-leisure support program based on sensory integration for 15 children with developmental disorders. The planned activity was based on sensory integration. In cases, the tendency of hyposensitivity, with the vestibular and proprioceptive, and hypersensitivity to tactile sense were inferred from JSI-R. The results demonstrated that some changes were observed during activities when providing activities based on sensory integration. The questionnaire results revealed generally positive feedback from parents about the state of their children.

Furthermore, it can be said that the activity fulfilled the expectation of parents.

Key Words：sensory integration, leisure support, developmental disorder